

岡倉天心著「東洋の思想、第11章足利時代1400年 - 1600年」

講談社学術文庫 1986年2月10日刊を読む

足利時代(1400年 - 1600年)を考える

1. 足利時代というのは、幕府を継いだ源氏の分かれの名をとって名づけられたものである。この時代は、鎌倉時代の英雄崇拜の当然の結果ではあるが、近代芸術の真の音調、すなわち文学的意味における浪漫主義、を打ち鳴らしている。

精神による物質の征服ということが、常に、世の諸力が努めて求める目的であり、そして、文化の各段階は、東洋でも西洋でも一様に、勝利の態度の強化によってしるしづけられている。ヨーロッパの学者が芸術の過去の発達を区別するために好んで用いる三つの用語は、正確さにおいては多分欠けるところもあるけれども、なおかつ不可避的な真理を有している。なんとなれば、生命の進歩との基本的原則は、全体としての芸術の歴史のみならず、個々の芸術家やかれらの流派の出現と成長との基礎ともなっているからである。 P145

2. 足利期の名匠たちの時代この方、日本の芸術は、豊臣および徳川の時代にわずかに退歩を見たとはいえ、着実に東洋的浪漫主義の理想——すなわち、芸術における最高の努力としての精神の表現——を守り通してきた。この精神性は、われわれにあっては、初期キリスト教の教父たちの禁欲的潔癖主義でもなければ、ましてや擬ルネッサンスの寓意的理想化でもなかった。それは、マンネリズムでもなければ、自己抑制でもなかった。精神性とは、事物の精髓もしくは生命、万物の霊の特性化、内に燃える火、と観念されたのであった。 P149

3. 足利時代の貴族は、かれらなりの趣味人で、かれらの藤原時代の先祖たちのように、豪奢の概念から洗煉の概念へと進んでいった。かれらは、好んで茅ぶきの家に住み、それは一見もつとも卑賤な百姓の家と同じく簡素であったが、しかもその結構は、相如あるいは相阿弥の最高の天才の設計によるものであり、その柱は、インドのもっとも遠い島から持ちきたった世にも高価な香木でできていた。その茶釜ですら、雪舟の意匠になる工芸のすばらしい逸品であった。かれらの言によれば、美、あるいは万物の生命は、外にあらわされたときよりも内にかくされたときに常にいっそう深みのあるものであり、それはちょうど、宇宙の生命が常に偶発的な外観の下にかくれて脈打っているのと同じであった。あらわに展示するのではなく、ほのかに暗示すること、それが無限ということの秘訣である。完全ということは、すべての円熟と同じく、成長が限られているがゆえに、感銘がないのである。

かくして、たとえば硯箱にしても、これを装飾するのに、外側は簡単に漆を塗り、見えないうちに高価な金細工を用いるというのが、かれらのよろこぶところであった。茶室を飾るのにも、ただ一幅の絵もしくは簡素な花瓶ですませて、部屋に統一と集中とを与えることにつ

とめ、また、大名の蒐^{しゅうしゅう}集の財宝の一切は、すべて彼の宝庫にしまいこまれて、そこから一つ一つが何かの審美的衝動を満足させるために持ち出されてくるのであった。今日にいたるまで、人々はもっとも高価なものを下着に着るが、それはさむらいが、何ということもない鞆^{さや}の中にすばらしい刀身を収めていることを誇りとしたのと同じである。人生の導きの綱であるところの変化の法則は、また、美を支配する法則でもある。 P155 ~ 156

4 . 雪村には、禅の理想のもうひとつの本質的な特性をなすところの、自由と、気安さと、洒脱味^{しゃだつみ}とがある。あたかも彼にとっては、経験の一切はひとつの遊戯にすぎないかの観があり、彼の強健な魂は、雄々しきもののさかん^{おういつ}な横溢のすべてに喜びを感じることができた。

多数の他の人々がこれらの人々の後につづいている一能阿弥、芸阿弥、相阿弥、宗丹、啓書記、正信、元信、その他の名匠の名が綺羅星のごとくに並んでこの時代をみだし、他に比すべき時代を見ない。というのも、足利の將軍たちは、芸術の偉大な庇護者^{ひごしや}であり、またこの時代の生活が、教養と洗煉^{せんれん}とをもたらすようなものだったからである。

しかし、当時における音楽の発達について若干^{じゃつかん}言及することなしに、足利時代の考察を離れることはできない。けだし、それほど芸術衝動の精神性を示しているものはなく、また、わが国民音楽が成熟した形であらわれてくるのは、この足利時代の間においてであるからである。

これより以前には、庶民の素朴な古謡を別とすれば、われわれにはただ六朝後期の舞樂があっただけである。そしてこれは、インドおよび中国に由来するものではあるが、なおかつ、ギリシアの音楽にはなほだ近いものである。そして、これは当然の話で、なぜかといえば、いずれもみなひとしく初期アジアの歌謡と旋律という共通の幹から分かれ出た枝にすぎなかったにちがいないからである。この舞樂は、かつて忘れ去られたことがない。われわれは、いまでもなお、日本において、昔ながらの衣裳をつけ、昔ながらの足拍子に合わせて、それが演奏されるのを聞くことができる。特定の世襲の人々によってそれが保存されてきたおかげである。それは、いまはおそらく少々機械的で無表情なものになってはいるが、しかし、アポロ〔ギリシアの日神、音楽神〕への讃歌は、舞樂の伶人^{れいじん}たちによって、いまなおその本来の様式において演奏されることもできるであろう。 P159 ~ 160

[コメント]

室町時代という表現もあると思うが、足利時代という表現も、もっと大切にすべきと考えたい。本書を通じて足利時代のよさにも、もっと注目すべきと考える。

- 2009年7月14日林明夫記 -